

垂水史談会報

第 59 号
2024 (令和 6) 年
10 月発行

【報告】

垂水島津家墓所の災害復旧

にともなう発掘調査成果(報告)

垂水市教育委員会では、令和二年度に大雨による土砂流入災害に被災した垂水島津家墓所の災害復旧に努めています。令和六年度は、今後の復旧作業のための基礎情報を得るために、発掘調査を実施しました。限られた範囲と掘削深度までの調査ではありませんでしたが、そんな中でも大きな成果を得られました。

まず、お墓の内部について。今回被災してしまっただけの子どものお墓が主ですが、江戸時代に葬られたのか、明治以降に別の場所からお墓だけ移されてきたのかわからないままでした。そこでお墓の下を発掘してみると、硬くしまった土の層があり、そこには小さく潰れた軽石が混じっていました。これは人の手で突き固めたというを示しており、またその下からは墓石の周囲とはちがう、黒色の柔らかい土が出てきました。これらの成果から、「穴を掘って埋葬主体(陶器の骨壺や木桶の棺など)を埋め、蓋をするように固く突き固め、その上に墓石を設置した可能性が高いこと」がわかりました。同時に、埋葬主体を伴うという事は、史跡北側のお墓は江戸時代からここにあった可能性が高くなりました。



【写真：新規石造物】

次に、新しい石造物の発見もありました。史跡北東から検出されたこの石造物は、お墓と平行に並んでいること、お墓が設置された土の層に埋め込まれていること、その石造物を境として土の様相が異なること、石造物に丸型の別石を埋め込んだような痕跡があることなどが、点から、「柵のような役割を持つていた石造物」ではないかと考えられます。これは当時の史跡範囲を示唆する重要な資料となるかもしれません。

【写真】
そして北側の斜面を発掘すると、シラス台地の麓であるため、長年の土砂流入に見舞われてきたという経緯が地層にあらわれていたと共に、お墓を設置した時期の土の層から、「四角形の柱の跡」がみつかりました。もしかする

と、今回被災したお墓たちに対する覆い屋のようなものがあつたのかもしれない。

国指定史跡「鹿兒島島津家墓所」に指定されているところのうち、お墓の下までも含めた発掘調査を行えたのは、垂水島津家墓所だけです。それは災害に見舞われるというマイナスから出発したのですが、今回の調査成果は今後プラスへ転じていくための大きな足掛かりになります。今後とも迅速な災害復旧と、史跡の価値を高める事業に努めてまいります。

(文責：垂水市教育委員会 高嶺光佑)

令和6年度

『戦争のあった頃のことを知ろう』展

市立図書館：八月一日～同三十一日

令和6年度の『戦争のあった頃のことを知ろう』展を市立図書館で開催しました。

第二次世界大戦が終わって79年目に当たる今年、平成9年10月に根占町(現：南大隅町)大中原で発見された日本軍戦闘機『紫電改(しでんかい)』の機銃や、満州からの帰国した赤崎雅仁さんが保有する『満州切手』などが展示されました。

また、『垂水史談会復活30年記念』のメモ

リアルイベント企画として、昭和20年8月5日の垂水大空襲の日によせて、8月4日に垂水市民館で「戦争体験を聞く会」が催され、鹿屋市戦跡ガイドの小手川清隆さんと、霧島市在住の赤崎雅仁さんをお迎えし、『昭和20年8月5日の垂水空襲と垂水海軍航空隊』と、『満州からの引き揚げ体験』を聞かせていただきました。

詳細は、『垂水史談会報第58号 2024(令和6)年8月発行』を参照して下さい。

『戦争のあった頃のことを知ろう』展 アンケートより

「貴重な資料を目にして子供も興味深くみていました」(垂水市10歳以下と21～50歳)

「市内にこんなにたくさんさんの遺跡が見つかったなんて、はじめてでした」(垂水市11～20歳)

「戦争の話は何度聞いても心が痛くなります。このようなことが二度と起こらないようにしたい」(垂水市11～20歳)





人の国民として尽力していきたい。そう思っています。」(垂水市 51〜80歳)

「直接戦争の時代を生きた人から聞いた話は、この様に何らかの形で記録を残し引き継いでいく大切さを感じます。今は亡き祖母から聞いた話が30年以上前となります。」(垂水市 51〜80歳)

「よかった。また見たい。」(東京都 21〜50歳)

「鹿児島出身の戦没者が一番多い東京硫黄島での戦い。遺族も市内に居ますので硫黄島も取り上げてもらいたい。」(鹿屋市 51〜80歳)

「戦争のない時代、平和な時代がいつまでも続くように祈る」(垂水市 51〜80歳)

「せんそうは、にどとあつてはいけないと思いました。」(垂水市 10歳以下)

『垂水市内で発掘された土器』の展示

また『戦争のあった頃のことを知ろう』展の合同企画として、一角に『垂水市内で発掘された土器』のコーナーを設置しました。

縄文時代、古墳時代にかけて使われた「かめ形土器」「つぼ形土器」「かん形土器」「ミニチュア土器」などが展示され、分かりやすい解説と共に、間近で遺物を鑑賞できる環境が整えられました。



(新原清美)

【研究ノート】

水神碑 — 錦江町代若宮神社境内—

旧田代町の若宮神社境内に建つ水神碑である。

川原新田開発は島津綱貴の命による藩営事業で、元禄八(一六九五)年から同十四(一七〇一)年まで八年かけて工事が行われた。水路は雄川の上流木の口から取水され、平石まで約四キロメートルの川原一帯を潤し、六十四町歩の田畑が拓かれた。

(高さ145、5cm×正面横幅38、0cm×側面横幅36、0cm)



【転写】

(正面)

元禄十四^辛歲



奉造立水天種字像 結衆 敬白

四月吉祥日

(左面)

御新田檢者

御新田溝元禄第八^乙歲初

肝付源之●尉

當今元禄十四^辛歲而水天像

同 弟子丸舎人尉

以作人衆力欲造之也

同 井手籠甚左衛門

同 河田式部左衛門

(背面)

● 井手籠吉左衛門

同 迫田長左衛門

同 前田太良兵衛

(右面)

なし

(*文字の不明な部分は、資料を参考に●やゴシックで表記した。)

【左面文の読み下し】

御新田溝は元禄第八乙亥の歲に初めて、当今、元禄十四辛巳の歲、而して水天像は作人の衆力を以て之を造らんと欲する也。

【注】

○禰^{ほんじ}・梵字、音はバン。大日如来を表わす種字^{しゅじ}。○溝^{みぞ}：用水路。○元禄第八^{はち}・元禄八年。一六九五。○水天^{すいてん}：水をつかさどる竜神。○作人^{さくじん}・百姓と同義。○欲^{ほつ}・碑面が風蝕等により判りづらい。『鹿児島県の土地改良記念碑』では「飲」とするが、拓本や美見から「欲」とした。

【参考資料】

- ・『新編田代町郷土誌』(平成十七年)
- ・『鹿児島県の土地改良記念碑』(一九八九年)

(瀬角龍平)